

---

# 漆黒は染まらない

ぴこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒は染まらない

### 【Nコード】

N9814L

### 【作者名】

ぴこ

### 【あらすじ】

もし『漆黒の追跡者』でのあの出来事が、夢じゃなかったら。

蘭の突然の死から、しばらくしてコナンは米花町から姿を消した。そして10年後、成長した少年探偵団の通う帝丹高校に、一人の転校生がやってくる。『江戸川コナン』と名乗った彼は、かつてのコナンとは別人のような冷酷さで……。

## 第一話 夢が現か

夢だと思った。

けれどこの夢は、いくら待っても覚めてはくれなかった。  
夢だと思っていたかった。

覚めない夢ほど、夕子の悪いものはないけれど。

この世で一番大切なものをなくして、そして彼は 自ら孤独  
になることを決めたのだ。

「コナンくん！ 早くしないと遅刻しちゃうよ！」

おたまを持った蘭が台所から顔を出した。コナンは、寝起きなのかボーンとした表情で机のそばに佇んでいる。コナンは蘭に気がつくのと、どこかほっとしたように蘭を見つめた。

蘭はコナンがまだパジャマでいるのを見てとると、怒ったようにコナンのそばに近づいた。

「もー！ 早くしなさいって言ってる……」

しかし蘭の怒りの言葉は続かなかった。コナンのその表情が、寝起きのものだけではないことに気がついたからだ。

「……どうしたの？ コナンくん。具合悪いの？」

屈んでコナンの顔を覗きこむと、心配そうに問い掛ける。

コナンはそんな蘭を見つめながら、ぽつりと呟いた。

「……夢」

「夢？」

「夢を見たんだ。すごく嫌な……」

コナンの言葉に耳を傾けながら、蘭は、とりあえず体調が悪い訳ではない事実にあ堵する。と同時に、普段は大人っぽいこの少年が、今朝見た夢を恐がっていることにほえましさを感じていた。

「夢ってどんな？」

安心させるように優しい声色で声をかけると、コナンはちょっと戸惑ったように首を傾げた。

「蘭姉ちゃんが……蘭姉ちゃんがね……えーっと……なんだっけ」

確かにすごく怖い夢を見た気がするが、いざ思い出そうとするとなかなか思い出すことは出来なかった。先程から頭もはつきりしな

い。脳みそにモヤがかかったような感覚に酷くいらつき、コナンは右手で前髪をかきあげた。

その仕草を、見た夢の子供らしい恐怖のためと思った蘭はふふと笑うと、コナンの右手に自分の手を重ね、書き上げられた髪を解いて手を降ろすと、拳を前へ突き出した。

「大丈夫よコナンくん！ 今度こわい夢を見たら私をその夢に呼んで！ お姉ちゃんが空手でやっつけちゃうんだから！」

ね？ と笑いかける蘭はとても可愛いくて、コナンはどきりとする。

優しい蘭。

可愛いけれど、とても強い蘭。

涙脆い蘭。

人の苦勞をしょいこんで、自分のことのように心配してしまうお人よし。

俺の大切な幼なじみ。

瞬間的に想いが溢れそうになって、コナンは胸が苦しくなる。

途端、蘭と過ごした記憶、蘭への想いが一気に奔流し、それは止める術を持たなかった。

小さい頃から一緒だった。

これからもずっと一緒だと思っていた。

伝えるはずだった想いは、伝えることが出来なのまま。  
真実を告げることの出来ぬまま。

蘭は、死んだ。

## 第二話 悲しい現実

「……………くん……………ナ……………」

遠くで誰かが呼ぶ声がする。泣きそうな声だ。泣きそうな少女の……………いや、泣いてる、のか？

もうあいつの涙は見たかないのに、俺はまた泣かせてしまったのか。まったくもって情けない。

俺のために泣かないでほしい。お前の笑顔が好きなんだ。

笑ってくれ。頼むから。

大切なんだ。かけがえのない存在なんだ、蘭

「……………ら、ん」

うつすらと目を開けると、まず白い天井が目に入った。状況がよく飲み込めないまま辺りを見回すと、どうやらここは病院のようであるらしい。

「……………コナンくん！」

コナンが身じろぎしたことに気がついたのか、嬉しそうな声をあげてすぐに少女がコナンの傍に寄ってくる。一瞬、コナンはそれが蘭であると思った。しかし、自分の幼馴染と一回りも二回りも違うシルエットのその少女は、蘭ではなかった。

（さっきの声は、歩美だったのか……）

蘭でなかった、という安堵感と、何故かはわからないが、蘭ではなかった事態にひどく恐ろしい感情が湧きあがる。

とても嫌な夢を見ていた気がする。

蘭が、撃たれて、死ぬ、夢。そう、あれは　　夢だ。

どうも頭がはつきりしない。どうして自分がここにいいのか、コナンには分からなかった。とにかく蘭に会いたい。

「しん……コ、コナン君！　目が覚めたのか！」

「は、かせ……痛っ」

博士の声に、ベッドから起き上がろうとしたコナンは、頭に走った痛み顔に顔をしかめた。

「あ、ああ……じつとしておらんといかんよ。君は頭を強く殴られていたんじゃないから」

博士が宥めるようにコナンをベッドに押し戻す。同様に近くにいた光彦に、先生を呼んできておくれ、と告げた。光彦は嬉しそうな様子でコナンを見ると、はい！　と元気よく返事してコナンの病室から駆け出す。

その様子を何とはなしに眺めていたコナンが、博士に問いかける。

「博士……？　殴られたって……いったい、何が……」

その言葉を聞いた途端、博士は何とも言えないような表情をした。瞳に悲哀の色を浮かべた彼は、言おうか言うまいか悩んでいるかのように口を開け閉めする。

そばの椅子に座っていた灰原が、博士の様子を見かねたのか、ぼ



つりと呟いた。

「覚えていないの？ あなたは……」  
「コナン！！」

灰原の言葉を遮るように、光彦にコナンの目覚めの知らせを聞いた小五郎が病室に飛び込んでくる。次いで、医者と看護師も入ってきた。

「……うん、この調子なら、もう大丈夫でしょう。明日にでも退院出来ますよ」

コナンの胸に聴診器を当てていた医者は、安心させるように微笑んだ。傍にいた看護師もお大事にね、と声をかけると、てきぱきとカルテに記入する。

小五郎はハラハラした様子で検診を見ていたが、大丈夫だとわかると、ほっとしたように胸をなでおろした。去っていく医者たちを見送りながら、コナンを振り返り、肩を掴んだ。必死な表情でコナ

ンに問いかける。

「……コナン！ 教えてくれ、何があったんだ!？」

「ま、待つとくれ毛利くん！ コナン君はまだ頭がはっきりして  
なくて……」

小五郎の切羽詰まった様子に驚いた博士が慌てて止めていると、今  
度は目暮警部と佐藤、高木、千葉刑事が病室に静かに入ってきた。

「落ち着きなさい、毛利くん。コナンくんもまだ状況がよく呑み込  
めてないようだし……」

「ですが、警部殿……もう、もうコナンしか手がかりがなくて……」

憔悴しきった様子の小五郎には、いつものおちゃらけた雰囲気は  
微塵も感じない。

一連の流れを他人事のように悄然と見ていたコナンの頭は、よう  
やく活動を始めたらしい。頭の痛みをこらえて起き上がると、ベッ  
ドの周りにいる刑事たちを見た。

佐藤はコナンと目が合うと嬉しそうに、だがどこか浮かない様子  
で、コナンの傍まで寄ってくる。

「コナンくん！ 意識が戻って安心したわ」

「……ありがとう。……刑事さん、どうしてここに？」

いまだにモヤがかかったようにはっきりしない頭をゆるく振った  
コナンは、佐藤を見あげる。

「コナンくん、覚えていないのかい？」

その様子を見ていた高木もまた、コナンの傍まで寄ってくる。

「覚えていないって……」

とまどった様子でそう呟いたコナンを見て、佐藤は高木に目配せをした。

「……コナンくん、病室で目が覚める前、どこまでなら覚えてる？」

佐藤はベッドの傍で身をかがめてコナンと視線を合わせると、優しく問いかけた。その質問に、引き離されていた小五郎も、宥めていた博士と目暮も、耳を傾ける。

どこか尋常ではない雰囲気を感じたコナンは、はっきりしない頭を抱えながらも、真剣に思いだそうとする。

「えっと……確か……元太と、キャンプに行く準備の確認の電話をして……それから、懐中電灯を事務所に取りに行つて、……それから……」

そこまで呟いたコナンの表情がさつと変わる。ただでさえ白かった顔色が、一瞬にして青白く染まった。さっきまでかかっていたモヤが一気に晴れ、コナンの脳に衝撃的な映像を蘇らせた。

夢では、なかった。

あれは夢じゃなかった。

懐中電灯を取りに来た俺に拳銃を突きつけたのは、俺がずっと追っていた組織の人間、ジン。そして、ウォッカ。

あいつは俺の動きを封じて片手で軽々と持ち上げると、事務所のドアを見せつける。

外から蘭の声がする。物音に気付いたらしい。

来るな、蘭！ 来るな、来るな来るな来るな！！

ウォツカがドアの前で拳銃を構えた。俺は必死で声にならない叫びをあげる。やめろ、やめてくれ、頼むから、あいつだけは……ッ  
！！

ジンの腕は、子供のこんな手ではビクともしない。  
ドアが開かれた。

蘭の額に容赦なく銃弾が撃ち込まれ、蘭は力もなくその場に崩れ落ちていく。

溢れ出る血、動かなくなった肢体。真っ赤に染まった蘭に俺は言葉を失くす。

見たくなかった現実に気が狂いそうだった。  
彼女がもう俺に笑いかけてくれることはない。

蘭は、俺のせいで、撃たれて死んだ。

夢なんかじゃない。

これは、現実だ。

### 第三話 やすらかな

「　　ッ!」

吐き気がして、コナンは口元を手で押さえた。

コナンの顔色が青白く染まったのを見て、全員が息を飲む。

「コナン!! 思い出したのか!? 犯人は、どんなやつだったんだ!? どんなことでもいい! なあ、コナン……!」

「落ち着きたまえ毛利くん!」

コナンにつかみかかりそうな勢いの小五郎は、再び目暮に止められる。

そんな小五郎を目の端にとらえながら、コナンは震える指先を叱咤して近くにいる佐藤にベッドから身を乗り出し、尋ねた。

「ねえ、蘭は……! 蘭はどこにいるの!?!」

「コナンくん落ち着いて、……蘭ちゃんはね、蘭ちゃんは……」

佐藤の言葉を待つより早く、コナンはベッドから飛び降りて駆け出した。身体中が酷く軋む。

「待ちなさいしん……! コナンくん! 君の怪我は、頭だけじゃないんじゃないぞ!!」

「博士、待つて! 今は……」

コナンを連れ戻そうとする阿笠を、今度は灰原が止める。コナン

の心情を推し量った。姉を亡くしたことのある身としては、今のコナンの状況は察するにあまる。

今は、コナンの身体の手配をするより、一刻も早くコナンを彼女の元に行かせてやりたかった。

（蘭！……らん！）

コナンは必死な思いで廊下を走っていた。生きていて欲しいと願いながらも、自分はある場所へ一直線に向かっている。こんな時、自分のどこか冷静な判断力が憎らしかった。

痛みを止めている暇はない。息を切らして到達したドアの前に立つと、“遺体安置室”とプレートに書かれた扉を開く。

「蘭！！」

愛しい幼なじみの遺体は、静かに横たわっていた。傍らには蘭のそばで泣き臥している園子と、ハンカチで目を押さえている英理の姿があった。

突然部屋に入ってきたコナンに気がついたのは、英理だけだった。

「……コナンくん、目が覚めたのね。安心したわ……」

非常に有能な頭脳を誇り、普段は鋭敏な雰囲気を漂わせている彼女が、今は女性的な弱さを前面に出し、その表情には悲愴的な色合いが滲み出ていた。

しかし小さな子供を前にして何とか冷静さを保とうとする様は、正直言って痛ましい。そしてそれは失敗に終わり、声は震え、再び

嗚咽を漏らした。

コナンは静かに蘭に近づいて、小さな身体で必死にベッドを覗きこむ。

蘭の額は綺麗に繕われていた。

あんなに悲惨な最期を遂げたのに、その『寝顔』はとても安らかだ。

今にもおはようコナンくん、と笑って起きてくれるような気がして、コナンは蘭の頬に触れた。

その頬は氷のように冷たかった。

蘭の死が、いよいよ現実となってコナンの目の前に翳される。

呆然と蘭を見るコナンの視界からそっと遮るように、蘭の面に白い布を被せたのは、英理だ。

子供にはキツイだろうと思いつた行動だが、英理もまた蘭の冷たい頬に触れ、堪えていた涙を溢れさせた。

その様子を痛ましげに見ていたコナンは、自分のある種異様な冷静さに違和感を覚える。

もっと、取り乱すかと思った。英理や園子のように。

取り乱して縋り付いて、幼なじみの名前を呼び続けると思っていた。

しかし、蘭の遺体を見たら、何も考えられなくなってしまったのだ。

心がぐちゃぐちゃにかき割られてしまったようで、胸は引き裂かれるような痛みを訴えるのに、それを表情に出すことが出来ない。

第三者がいるからかもしれない。コナンの姿のまま、理性を失って叫ぶことは避けるべきだから。

無理矢理にそう理由づけたコナンは、あまりに理性的なその脳みそを、殴り飛ばしてやりたかった。



#### 第四話 偽りの証言

「じゃあ、コナンくんは、事務所に懐中電灯を取りに行つて、背後からいきなり撃たれたのね？」

「うん、いきなり拳銃で腕を撃たれて、びっくりして振り返ったら、その瞬間に殴られて気絶しちゃったんだ」

「犯人の顔は？」

「……見たかもしれないけど、覚えてない。暗かったし……。でも、男の人の声でしたよ」

「そう、ありがとう」

佐藤はコナンの証言を丁寧に手帳に書き留める。

コナンは病室で事情聴取を受けていた。辛かったら今日じゃなくても良い、と佐藤は言ってくれたが、コナンには先のぼしにする気は毛頭ない。それには小五郎も、また英理もほつとした様子で、蘭を殺害した犯人の手掛かりを掴むために、真剣にコナンの話に耳を傾けている。

当時のことを思い返しながら、コナンはさらさらとウソの証言を述べていた。真実を彼らに伝えるつもりははなからなかった。彼らを信頼していない訳ではない。伝えられない理由が、ちゃんとあるのだ。罪悪感を覚えない訳でもなかったが、これ以上彼らを巻き込む訳にもいかなかった。

「……ねえ、まさか工藤くん、彼らの仕業じゃ……」

聴取を聞いていた灰原が、そつとコナンに近づいて耳打ちする。

「……それはねえよ。もしそうだとしたら、奴らが俺を生かしておくはずがない」

「……そう、よね……」

安心させるように灰原にそう言うと、コナンは再び佐藤を見やつた。

そう、もしコナンを狙って組織の人間が来たとしたら、蘭だけを殺害してコナンを生かすとは考えられない。一応は納得したらしい灰原は、引き下がって聴取の様子を見守る。

「しかし、頼りのコナンくんも犯人を見ていないとなると……」

目暮は困ったように顎に手を当てる。

手詰まり。そんな雰囲気病室に漂う。

それを払拭するように、高木が口を開けた。

「警部、犯行はプロによる可能性が高いですよ」

「ああ。現場に犯人のものと見られる痕跡は何も残っていなかったからな。拳銃の入手ルートもわからない」

「手掛かりが少なすぎますね。今の時点で考えられるのは……」

「俺への復讐……」

静かにコナンの証言を聞いて考えをまとめていた小五郎は、高木の言葉を遮り、告げた。

「コナンは拳銃で撃ったにも関わらず殺さずに、蘭は一発で殺している。……何故、蘭だけを殺したのか？ 結論は簡単だ……俺の、娘だから……」

小五郎が苦悩したように頭を抱える。そんな小五郎を見た目暮が、焦ったように言い募った。

「今のところは、毛利くんへの復讐という線で調べを進めておる。毛利くんが今までに罪を暴いた犯人の中に出所者はいないか、その親族、関係者にまで範囲を広げ、犯行当時のアリバイのない者がいないかを調べておるから……なあに、すぐに犯人を捕まえてみせよう！」

「犯人は、コナンが俺の实の息子ではないこと知っている人物です、目暮警部……クソ！！」

それまで堪えていた何かが切れたのか、小五郎は壁を殴りつける。英理が慌てて背後から小五郎の肩に宿めるように手をおいた。

「あなた……」

「蘭が殺されたのは、俺のせいだ。俺の……クソオ！！」

怒りや無念、そういった感情がごちゃまぜになって、小五郎の心を苛む。刑事たちは、何と声をかけて良いかわからず、視線を床に向けた。

「あなた、違うわ。悪いのは犯人。あなたじゃないのよ」

英理は目を赤く腫らしながらも、小五郎をフォローする。それまで黙ってやり取りを見ていたコナンも口を挟んだ。

「そうだよ、おじさん、おじさんのせいじゃない。悪いのは、悪いのは……」

俺だ。

呟きかけた言葉を、コナンは口中で飲み込む。すべてをぶちまけてしまいたい衝動にかられながらも、コナンは必死にそれに堪えた。

「悪いのは、犯人だよ。僕たちは一刻も早く犯人を捕まえなきゃ」

「そうよ。名探偵さん。蘭のためにも……」

そこで英理は言葉を詰まらせる。溢れ出る涙を堪えることは出来なかった。今度は小五郎が英理の肩に腕を回し、抱き寄せる。

「英理……。大丈夫だ、俺が必ず犯人を捕まえてみせる！」

憔悴しきっていた小五郎の瞳に、炎が宿った。

「目暮警部、これから私も捜査に……」

加わります、という言葉は発せられることはなかった。目暮警部がそれを遮ったからだ。

「毛利くん。君はただでさえ昨日から手掛かりを捜して歩き回っているだろう。警察で出来る捜査はすべてしておくから、君は休みなさい。せめて、蘭くんの葬儀が終わるまでは……それまでは、彼女と、コナンくん、それから蘭くん………についていてあげなさい」

「しかし、警部殿……！」

「捜査資料はすべて見せる」

いいね、と念を押し、目暮は席を立った。

「よし、高木！ 千葉！ 佐藤！ 捜査に戻るぞ！ 絶対に犯人を見つけ出せ！」

「はっ！」

勢いよくそう言うと、目暮は病室を後にしようとする。それを佐藤が引き止めた。

「警部！　もしかしたら犯人はまたコナンくんを狙うかもしれない、ですから……」

コナンは覚えていないと言ったが、犯人はそう思っていないかもしれない。また、殺しそこねたと思い、再び殺しにくる可能性もな  
くはない。

どちらにせよ、コナンが今後も狙われる可能性があることにかわりはなかった。

「そうだな……、よし、高木！　お前はここに残って、コナン君の警護にあたれ」

「は、はい！　わかりました！」

びしつと敬礼した高木は病室に向き直る。

「頼んだわよ、高木君！」

すれ違い様に佐藤に声をかけられ、少し顔を赤くした高木だったが、すぐに顔を引き締め、刑事の顔になる。

目暮達が出て行くと、病室は静寂を取り戻した。

「……英理、目暮警部はああ言ったが、俺はどうしてもじっとして  
られない」

英理を抱き寄せていた小五郎がぽつりと口にする。

「あなたなら、そう言うと思ったわ……」

英理はそんな小五郎を見上げ、微笑んだ。

小五郎は立ち上がり、コナンのそばへやってくる。

「……コナン、本当に、犯人の顔は見ていないんだな？」

「……うん。ごめんなさい……」

「お前が謝る必要はない。お前だけでも無事で、本当に良かった……」

頭をぽんと撫でると、小五郎は真剣な眼差しでコナンを覗きこむ。

「どんなささいなことでも良い。何か覚えていることはないか？  
音がしたとか、匂いがしたとか……」

「……タバコの匂いがしたのは、覚えてる。あとは……わからない」

小五郎の真剣な眼差しに、ついヒントを述べてしまう。もっとも、手掛かりにはならないだろうが。襲いくる罪悪感に堪えるように、コナンは目を伏せた。

「……そうか。辛いことを思い出させて、悪かったな。ゆっくり寝てなさい」

小五郎はコナンを安心させるように何度か頭をポンポンと叩くと、コナンに背を向けた。

「それじゃ英理、行ってくる」

「行つてらっしゃい、名探偵さん」

小五郎が病室を後にすると、英理も立ち上がった。

「私は、園子ちゃんのところに行ってくるわ。あの子、蘭のそばから離れようとしないうから……。阿笠博士、高木刑事、それから哀ちゃん、コナンくんのこと、頼みます」

「お、おお、任せてくれ！」

ぺこりとお辞儀をすると、英理も病室を後にする。コナンの病室に残ったのは、コナンと阿笠と灰原と高木のみになった。病室のドアを見つめながら高木が呟く。

「強いなあ……二人とも」

「ええ……そうね」

高木の独り言に返事を返したのは灰原だった。

(……彼も……)

灰原はコナンを盗み見た。コナンは先程から表情を変えない。大切な人を失って辛いはずなのに、彼はそれに必死で堪えている。蘭を亡くしたことは灰原でさえこんなに辛いのに、いったい彼の苦しみはいかほどなのか。姉を亡くした時の絶望と喪失感を思い出し、灰原は身震いした。

「それで、しん……ああいやコナンくん、身体の具合は……」

「ああ、たいしたことないよ、博士」

それが嘘であることは、灰原にもわかった。体中の殴打痕に加え、かすった程度ではあるが足や手に弾丸を浴びているのだ。致命傷で

はないが、決して平気な傷ではない。

そして、もう一つ灰原の心に疑念が宿る。

何故彼は捜査に行かないのか。

こと蘭を殺害した犯人となれば、目が覚めた時点で彼は這ってでも捜査に行くはずだと思っていた。そう、あの小五郎のように。

（もしかして、彼は犯人を　　）

「それで、犯人の目星はついてるの？」

疑念を確信に変えるために、灰原はコナンに問いかけた。

「いや……せめて、俺が顔を見ていれば良かったんだけど……」

コナンの顔色が暗く染まる。そんな表情を捉えて、灰原はやはり自分の思い過ごしかと思う。犯人を見ていて、それを言わない道理があるはずはない。

痛いところをついてしまったと、何かフォローしようとする灰原の前に、コナンの様子を見た高木が慌てて言った。

「だ、大丈夫だよコナン君！ 犯人は僕たち警察が必ず見つけるから！ 眠りの小五郎だっついてついてるしね！」

「うん、そうだね……」

コナンは悲しげな顔で微笑んだ。そして下を向き、じっとシートを見つめる。

（絶対に、捕まえてみせるさ　　絶対に）

密かに固く握りしめられた拳が、緩められることはなかった。





## 第五話 贖罪

二日後、蘭の葬儀がしとやかに行われた。

大阪からは服部と和葉、そしてその両親も駆け付け、喪に服している。

蘭は飾られた写真の中で綺麗に微笑んでいた。

一通り式が終わった後、棺の前で園子は泣いていた。

三日前、テレビを見ていた園子に届いた大切な親友の突然の悲報は、園子の頭を真っ白にさせた。着の身着のままがむしやりに走ってたどり着いた先は 遺体安置室。親友は呼びかけても動かない。

ショックで身体中が震え出した。

最後に話した言葉はなんだったろう。あの時はまだ、これが最後だなんて思わなかった。

今までの蘭との想い出、語った夢、そしてこれから作られるはずだった想い出は、もう二度と叶うことはない。

いくら泣いても、涙は枯れなかった。

園子の背後に、そっと和葉が現れる。彼女もまた、園子同様泣いていた。

「蘭ちゃん……」

その声に正気づいたのか、園子は嗚咽まじりの声でしゃくりあげる。

「蘭がつ……なんで蘭が殺されなきゃいけないの……っ！　蘭は何もしてないのに、いい」

「ほんま、ほんまやつ……！　なんで蘭ちゃんが！　……うつうつ」

園子の肩に手を置きながら、和葉も泣き崩れる。静かに眠る蘭の冷たい亡きからは、犯人への憎悪を掻き立てる。

その様子をドアの付近で見ていた服部は、そばにいるコナンの表情が曇っていることに気がついていた。

服部が知らせを聞いてすぐさま葬儀に来てから、彼は黙りこくっていることの方が多かった。状況が状況だけに、かける言葉が見つからない。

「こんな時に！　蘭が大変なこんな時に！　あの男はどうしてんのよおっ！」

園子が怒りに任せたように床を叩き、泣きじゃくりながら叫んだ。それを聞きとめ、和葉も怒りの表情を浮かべる。

「工藤くん、葬儀来いひんかったよな。どうしてやつ」

震えた声が和葉の喉奥から出る。

「わかんない！　連絡つかないの！　何度もメール、したのに、返事もつ、な、無くて……」

途端、和葉の眉が釣り上がり、感情的に新一を詰った。

「最低や工藤くん……！　事件やなんや知らんけど、どうして、ど

うして蘭ちゃんに会いに来たらんの……！　蘭ちゃんより事件のが大事なん！？」

「ちょお、和葉、それは言い過ぎやで！　工藤はな……」

事情を知っている服部が、慌てて和葉に弁明する。姿形は変わろうと、本人がここにいるのだ。

しかし、その事情を知らない和葉は、聞く耳を持つとしなかった。

「平次は工藤くんの居場所知ってるんとちゃうの！？　どうしてひっぱってでも連れて来おへんの！」

「せやから、工藤は事情があつて来られんよって……」

「事情つてなんやねん！　蘭ちゃんより大事なことなんか！？　蘭ちゃんより事件取ったんか！？　そんなやつたら探偵なんてやめてまえ！」

「和葉ッ！」

和葉の暴言にさすがに服部も窘める。しかし、次いで口から出ようとした言葉は、声になることなく空中に霧散する。コナンが、服部の右手をぐいと引いたせいだ。

服部が小さなコナンを見下ろすが、その表情は大きな眼鏡で窺うことが出来ない。

「いいんだ、服部」

コナンが強い声で服部に呟く。

「せやけど、くど……」

「いいんだよ、平次兄ちゃん」

子供らしい表情で見上げたコナンの考えは、服部には完璧に読み取ることが出来なかった。

一人廊下に出たコナンは、歩きながら考え事をしていた。  
通りすがったガラスに映った自分の姿を見つめて、自嘲する。

先程の和葉の言葉は、決して暴言などではない。事情を知らない和葉のあの言葉は、至極もつともな意見だ。本来なら、何がなんでもやって来ないといけないのに……。

こんな小さな身体じゃなければ。

子供の姿が映ったガラスを、バラバラにしてやりたくなる。

（これは、俺が受けとめなきゃいけない言葉だ……）

すべては、俺のせいなのだから。

## 第六話 白を告げる

蘭の葬儀には、お馴染みの刑事たちも参列した。

葬儀を終えた佐藤は、隣りにいる高木に、ずっと引っかかっていた疑問を問い掛ける。

「ねえ高木君……おかしいと思わない？」

「えっ？ な、なにがですか？」

「コナン君よ」

「コナン君が？ なんで？」

唐突な質問にビックリした高木は、声を裏返らせる。

「確かに最近はあるまり喋らないですけど……」

「傷痕よ」

「傷？」

「コナン君のあの傷痕……おかしいと思わない？」

「だから、な、何がですか？」

いまだに佐藤の意図が掴めない高木は、困ったように頬をかく。

「コナン君の証言だと、撃たれてすぐに殴られて気絶したことになるけど、コナン君、首を締められた痕もある上、身体中殴打されてたわよね？ 犯人は気絶した後には再び殴ったのかしら？」

「確かに、それは変ですね。痛めつけられて気絶するならわかりますけど……」

「でしょ？ 相手が気絶してから痛めつける人間はあまりいないわ」

「たまたま犯人がそういう人間だったのかもしれないですし、もしかしたら、コナン君も記憶が混乱してるんじゃない」

「まだあるわ！ コナン君は、蘭ちゃんが殺害される場面を目撃していないはず。なのに、何故起きた時あの子は真っ青になって飛び出して行っただの？」

「じ、事務所で襲われた自分の状況と、周囲の人たちの反応で蘭さんに何かあったと察したんじゃない」

「だとしたら、普通は病室を探すはずよ。でもあの子は……真っ先に“蘭ちゃんの居場所”へ向かった。蘭ちゃんが殺されたことを知っていたから」

佐藤の推理に、高木は言葉を失くす。もし佐藤の推理が真実だとしたら、コナンは何故自分たちにそのことを言わないのか、高木にはわからない。

「ねえ、高木君。私の考えすぎかもしれない。でも、もしこれが事実だとしたら……コナン君は犯人を知っていて、脅されたんじゃないかしら」

「そんな、まさか……」

「仮定の話よ。でも、もしそうなら、……私たちが彼を守らないと」

小学一年生の身には、重すぎる。

一方、葬儀を終えた小五郎たちは、親族用の一室に集まっていた。これから、蘭との最後の夜を明かすことになる。

残ったのは、毛利夫妻とコナン、園子、博士、灰原、そして遠方

から来た服部と和葉である。

少年探偵団の子供たちは残りたかったようだが、親に連れられて帰って行った。

英理が皆にお茶をいれ、一息つくと、あることに気がついた。

「あら？ コナン君はどこかしら」

「あのボウズはまたちよろちよと……！」

「あかんやん、あの子まだ怪我完治しとらんし、探しに行かんと」

探しに行こうと立ち上がった和葉を慌てて引き止めたのは、服部だ。

「あああ、あかんねん！ ああ、いや、あのボウズは俺が探しとくさかい、お前は休んどき！」

「でも何かあつたら危ないわ。私も……」

蘭のことを思い出したのか、不安そうに立ち上がった英理も服部は慌てて止める。

「ええてええて！ あのボウズが行きそなところはだいたい見当つくからな、俺に任せとき！ ほな！」

矢継ぎ早に部屋を飛び出した服部はしばらくドアを振り返って見ていたが、誰もついてくる者はなく、ほっとする。そして窓から見える星を眺めながら、ぼつりと呟いた。

「見当がついとる、ねえ……。そら、つくわ」

彼が行くとしたら、あそこしかない。その場所を服部は思い浮かべたが、そこに行く気はなく、ヒマを潰すように廊下をぶらぶらと



歩いていった。

真っ暗な部屋に、一筋の光がさす。床にうつつた光には小さな子供のシルエットがあつた。キィと言う音を立てて部屋に入ってきたのは、コナンだ。

コナンは音を立てずに部屋の中を進むと、棺の前に立つた。蓋を開けようとするが、子供の力ではびくともしない。

一つ嘆息すると、近くの椅子を引っ張り出してその上に乗り、棺にある木製の小窓を開けた。

薄く張られたガラスの中には、花に囲まれた蘭がいる。うつすらと化粧が施されたその顔は、とても綺麗だ。切なそうに見つめた視線は、やがて固く閉じられる。

「……蘭、ごめん、ごめんな……」

普段の彼からは想像もつかない弱々しい声だった。わずかに震えを見せるその声は、コナンの心の闇を垣間見せる。

「待たせてごめん。俺が、俺が工藤新一だよ……蘭」

蘭は動かない。

「いなくなる前に、どうしてもこれだけ……これだけ伝えたくて、

こっそりここにきたんだ」

苦しそくに蘭に笑いかけたコナンは、一呼吸置いてから、言った。

「好きだよ、蘭」

透明なコナンの声が、涼やかに部屋の中に反響する。

愛しげにガラスを撫でると、もう一度、今度は囁くように呟いた。

「愛してる」

“工藤新一”の言葉は、誰に聞かれることもなく、棺の中に霧散して消えた。

## 第七話 コナンが消えた日

あの陰惨な事件から一週間が過ぎ、コナンは相変わらず毛利探偵事務所に住んでいた。

一週間目にして、コナンに危険はないとして、高木・佐藤両刑事の警護が解かれていたため、上の階の自宅から降りてきたコナンは、一人で探偵事務所を覗き込んだ。

蘭が倒れていた場所は綺麗に掃除され、事件など何も起こらなかったかのような清廉さを保っている。困っていたテーピングも剥がされ、以前のような居住空間が戻ってきていた。

あれから英理は小五郎と一緒に住むようになったが、まだ事件が起きた現場に来るのは辛いようで、事務所にはあまりやって来ない。一方小五郎は、一向に掴めない犯人の手掛かりを探すために、塵一つ見逃すまいと事務所に入り浸っている。過去に小五郎が暴いた事件の資料も漁り出して、一日中調べていた。目の下にはうっすら隈が出来ている。

「…………おじさん」

ドアから声をかけると、小五郎はボリボリと頭をかきながら声の主を見る。

「なんだあオメーか。ガキは早く学校に行けっ」

そう言い捨てると、また資料に向き直る。

「でもおじさん。すごい隈だよ。少し休んだ方が……」

「ガキが余計な心配してんじゃねえ！　ったく……」

こちらで休んでる暇はねえんだ、とゴチると、再び資料を漁り出した。

「コナン君の言う通りよ、あなた」

唐突に聞こえた声に小五郎は驚く。

「え、英理！？　お前……」

大丈夫なのか？　とは言えず、口の中に飲み込む。コナンの後ろに、英理はいた。

「旦那をサポートするのも、妻の役目ですからね。あなた、ここ一週間ロクに休んでいないでしょう。あなたが倒れちゃ、意味ないわよ？」

「で、でもだなあ……」

「あら、こんな小さな子供にも心配させちゃうなんて、ひどいおじさんよねえ？　コナン君」

「うん。おじさん、休んで」

コナンと英理を交互に見た小五郎は、観念したように溜め息を吐くと、持っていた資料を机の上に置いた。

「わあったよ。少し休む」

「良かった。自宅に朝ご飯が出来てるの。一緒に食べましょ」

とたん、小五郎の顔が微妙に引き攣る。コナンはすでに洗礼を受けた後なのか、どこか遠くを見てしょっぱい顔をした。

しかし小五郎は文句を言うことなく、そのまま事務所を後にする。

「それじゃ僕、学校行ってくるね！」

コナンはランドセルを向け、階段にいた小五郎と英理に告げた。

「いつてらっしゃい、コナン君」

「気をつけるよー」

どこか気のなさそうに言った小五郎だが、その実コナンを心配しているのが伝わってくる。

「うん……ありがとう、英理おばさん、小五郎おじさん」

呟いた言葉は、心の底からのものだった。

「……それじゃあ！」

コナンは二人を優しくな眼差しで眺めてから、くるりと踵をかえし、駆け出した。

駆け出していくコナンの後ろ姿を微笑ましげに見つめると、英理は呟いた。

「こんな時だけど、……こんな時だからこそ、私、コナン君がいてくれて良かったと思うわ」

「フン……。……まあどうせあいつの親は海外だし、このまま養子

にしちまうか」

「冗談とも本気ともとれる小五郎の言葉に、それも良いわね、と英理は笑うと、二人は連れだって自宅に戻っていった。

この日を境に、コナンが毛利探偵事務所に足を踏み入れることがなくなるとも、知らずに。

結局、元気良く駆け出していったコナンがその日、学校に行くことはなかった。

突然のコナンの失踪に当初は誘拐事件の可能性があると見て警察が捜査に乗り出したが、それは事務所にかかってきた一本の電話で終息する。

江戸川文代と名乗る女からの電話は、小五郎の怒りを湧き立たせた。

ここにいと危険なので息子を連れ帰ることにした、残った養育費は自由に使ってくれという旨の電話は、傍で張っていた警察関係者をも絶句させる。文代に言われて電話を代わったコナンの、今までありがとう、の声に安堵はしたが、奔放な親に振り回される子供の不憫さを想わずにはいられなかった。

こうしてコナンは、米花町から、そして親しかった者たちの前から姿を消した。

## 第七話 コナンが消えた日（後書き）

ここまでお読みくださりありがとうございます。

ようやくコナン失踪までたどり着きました。

あらすじの部分がかなり先の出来事で何じゃコレ状態だったので、急ピッチで本編を進めました。

蘭ちゃんの死は軽く流したくなかったので、丁寧に描写してます。

（…長さ的な意味で…）

ここまではほんの序章<sup>のはず</sup>です。

基本シリラスですが、10年後は割り他希望のあるお話になると思うので、お付き合いいただけると幸いです。

あと、文章については、校正せず結構適当に書いてます。（そこ丁寧にしちやうと終わりが見えないので）

考えるんじゃない！感じるんだ！の気概で読んでください（笑）

それでは、また。

## 閑話 転がないビー玉

トントンとリズムの良い音が聞こえ、ガチャリと静かに開けられたドアから、蘭が顔を覗かせる。

漂って来た美味しそうな匂いにコナンは目を開けた。

「あ、ごめん、起こしちゃった？」

「うっん、起きてたから」

と言いつつも、コナンの声は寝起きの色合いを滲ませている。蘭はそつとコナンの傍に腰を下ろすと、持って来たお盆を横に置いた。

「コナン君、具合はどう？」

「もう熱は下がったし、大丈夫だよ」

コナンがそう言っても不安が拭えないのか、蘭はコナンの額に手をあてた。

額が熱くないのを確認して、ようやくほっとしたように息を吐き、良かった、と微笑みながら、持って来たお盆に乗っている小さな鍋の蓋を開ける。

湯気がもわつと立ち上がり、はっきりとした良い香りがコナンの鼻腔を掠めた。

「卵粥作ってきたんだけど、食べられる？」

「うん！　すごく美味しそうだね」

布団から起き上がり、蓮華を取ろうとすると、蘭がニコリとキレ



イな笑みを浮かべた。何か嫌な予感がして、手を止める。こういう時のコナンの嫌な予感は、新一であつた頃から外れたことがなかった。

蘭はこれ以上ないほど純粹に輝く笑顔で、

「食べさせてあげる」

と語尾にハートマークが付きそうな調子で言ったのだ。

無論、中身が高校生であるコナンには恥ずかしいことこの上ない。当然コナンは真っ赤になって拒否するのだが、蘭は引き下がらなかった。コナンの具合が良くなり、ご飯が食べられるようになったことによほど安堵したらしい。

結局、コナンは蘭に卵粥を食べさせてもらうことになる。

はい、あーん！ と出されるスプーンに恥ずかしさと多少の抵抗を感じながらも、今は病み上がりの子供なのだし、たまには素直になるのも良いかと思い直し、蘭の好意に甘んじることにする。

好きな子のお願ひには、やはり弱いのだ。

次の日、コナンは4日ぶりに学校に登校した。少年探偵団の子供たちに心配されながらも、小学生として一日を過ごす。

あつという間に下校時刻になり、コナンは途中の道で探偵団と別れ、灰原と帰途についていた。

「それで？ 体調はもう大丈夫なの？」

「ん？ ああ、大丈夫だよ」

「それにしても酷かつたらしいじゃない」

そっけなく言った灰原だったが、その瞳には心配の色が垣間見える。

「ああ、まあ、なあ」

灰原の言葉に随分キツイ風邪だったなと思い返したコナンは苦しさを思い出して顔をしかめた。あんなに酷い風邪は久々だった。

4日前の朝、急な発熱で床に臥せたコナンは、医者に行き風邪と診断を受けたものの、40度近い異常な高熱の状態が続いていた。解熱剤が効かず熱も下がらないまま日にちが経ち、蘭などばかり心配したらしい。

しかし、何日間も寝込んだおかげで、今はすっかり元気を取り戻している。

これも、蘭がずっと傍にいて、コナンの看病をしてくれたおかげだ。あの少女には本当に頭が上がらない。

「とにかく、あなたは身体が小さくなって、抵抗力が以前と比べて格段に落ちてるんだから、気をつけなさいよ」

「なんだよ、心配してくれてんのか？」

「……タチの悪い風邪をうつされたくないだけよ」

灰原はぶっきらぼうにそう言うと、ぷいと顔を反らす。しかし何か思いついたのか、再びコナンを見返した。

「そう言えば、あの彼女に心配を山程かけた揚句、看病してもらったんでしょ？ 何かお礼したら？」

「そつだよなあ……。手袋はこの前贈ったし……」

何がいいだろう？ と首を傾げるコナンに、灰原は呆れた視線を投げかける。

「あなたね……。小学生がそんな立派なお礼が出来る訳ないでしょ。もつとささいなものにしなさいよ」

「え？ あ、ああ、そうか。……ささいなものねえ」

再び悩み始めたコナンを横目で見てほのかな笑みを浮かべた灰原は、ちょうど差し掛かった曲がり道で足を止めた。

「それじゃ、私こっちだから」

「ああ。じゃーな」

灰原の後ろ姿を見送っても尚、コナンは悩んでいた。勿論、蘭への贈り物についてである。

（コナンとして蘭に何かプレゼントしたこと、なかったんだなあ）

盲点だった。

蘭にはいつも世話になっているし、今回は殊に心配をかけてしまったので、感謝から何か贈りたいと思うが、何分小学一年生が贈る物、と言うのが想像がつかない。

（そっぴや、元太たちが蘭の関東大会優秀祝いに貝殻で金メダル作ってたっけ）

あれに命を救われたことも思い出して、ほのかに心が暖かくなる。子供はいつだって純粹だ。

（手作りがいいのか。      っても貝殻なんてこの辺じゃないしな

あ)

と、その時ふと視線をやった駄菓子屋に、ビー玉が置いてあるのが目に入った。

まだ高い位置にある陽に照らされて、キラキラと輝いている。その姿に懐かしさを感じながら、コナンはあることを閃く。

そして何かを思い出すかのような仕草で空を見上げると、青いビー玉を一つ、手に取った。

「……で、作ってみたは良いけど、これは……」

誰もいない探偵事務所の椅子に座り右手頭を抱えたコナンのもう一方の手には、茶色の細い紐に結び付けられたビー玉の姿があった。ビー玉を結び付けている紐の根っこには、不揃いな小さな輪が四つある。

コナンは、ビー玉の根付を作っていた。いや、作っていた、はずだった。

昔よく母親の有紀子が根付を作っていたのを思い出し、無駄に容量のある記憶力のおかげで作り方も覚えていたため、それにしよう

と思い立ったは良いが、肝心なことを忘れていた。

コナンは少しばかり手先が不器用だった。

不揃いの四つの輪も、花の形にするつもりで紐を編んでいたのだが、お世辞にも花には見えない出来だ。やけっぱちな気分になって、いつそ最初から四ツ葉のクローバーだったことにしようと思う。随分不揃いなクローバーだが。

四苦八苦しながらようやく完成した頃には、すでに三時間が経とうとしていた。

手の平にあるビー玉の根付は、根付と言うには、少々いびつだった。

自分の不器用さに呆れて半笑いになってしまふ。

作ったは良いが、さすがにこれをプレゼントするのは気が引ける。

（やっぱり違うのにするか……）

ビー玉の根付というのは良い案だと思ったが、また別のものを用意することに、ビー玉についた紐を外して捨てようとした時だった。

「なにしてるの？ コナン君」

「わっ！」

突然後ろから渦中の人物に声をかけられ、コナンは本気で驚く。とつさに根付を隠して振り向くと、制服姿の蘭がいた。

「ら、蘭姉ちゃん！？ は、早いね……」

「何言ってるの、もう六時だよ？ 遅いくらいよー」

時計を見ると確かに六時を指していた。随分長いこと根付作りに熱中していたらしい。

「遅くなっちゃってごめんね、お腹空いたでしょ？　すぐ夕飯にするから……の前に」

蘭がニマリと笑った。コナンは思わず後ずさる。

「さっき何か捨てようとしてたよね？　何隠してるのかな？　お姉ちゃんに見せなさいっ」

「な、何も隠してないよっ」

「嘘おっしやい！　その隠れてる後ろ手は、何なのかなーっ？」

「あ……だから、それは、その……」

ニコニコと笑っている蘭は実に楽しそうだ。テストの点でも隠してると思っているのだろうか。

そうこうしている内に、蘭はじりじりとコナンに近づき、それに伴ってコナンは壁際へと追い詰められていた。

「コーナーーンくーん？」

ついに退路がなくなったコナンは、一瞬の逡巡の後、ようやく観念することにした。

「……蘭姉ちゃん、笑わないでよ？」

諦念の色を浮かべ、コナンはおずおずと蘭へ根付を見せる。

「はい。これ……」

コナンの手から根付を摘み上げた蘭は、しげしげとそれを眺める。

「……ビー玉、の、根付？ にしてはちょっといびつね……。でも可愛いじゃない！ どうしたの？ これ」

「……あの……僕が作ったんだ」

「えっ？ コナン君が？」

驚いた蘭が、根付とコナンを交互に見直す。

「うん……。僕、風邪引いて蘭姉ちゃんに心配かけちゃったし、いっぱいお世話してもらったから、何かお礼出来ないかなって思って……」

「……コナン君……」

「でも、それ失敗しちゃったから」

「捨てようとしてたの？」

「……うん」

だから返して、とコナンが続ける前に、蘭がコナンに抱きついた。

「ら、蘭姉ちゃん！？」

「コナン君、どうしよう、本当に嬉しい……！」

コナンを抱く腕に力がこもる。

一生懸命、私のために根付を作ってくれたなんて。嬉しすぎて胸が張り裂けそうだ。

「ありがとう、大事にするね」

「あっ……それは失敗しちゃったやつで」

捨てようとしてたやつだから……」と言つ言葉を蘭が遮る。

「どうして？ コナン君が一生懸命作ったやつじゃない。それに、すぐく素敵に出来てると思うよ」

「蘭姉ちゃん……」

「本当にありがとう！ 宝物にするね！ コナン君大好き！」

もう一度コナンに抱きつくと、とびきりの笑顔に向けた。

そしていびつなビー玉の根付を大事そうに抱えると、今夜はコナン君の大好きなハンバーグにするね！ と張り切って台所へかけていった。

コナンの顔は、赤い。

その後、蘭の部屋の机にビー玉のオブジェが一つ、大切そうに飾られているのに気づくのは、コナンただ一人である。



## 第八話 十年越しの邂逅

深夜零時。

ほのかな明かりの灯る人通りのなくなった道路を、一台の車が通り過ぎる。

闇に紛れそうな色のその車は、ポルシェ356Aだ。

そのクラシックカーの中には真つ黒な服を着た二人の男が乗っていた。

「奴の居場所がわかった」

助手席に座り電話をかけていた銀髪の男は、要件がわかり次第すぐに電話を切り、ハンドルを握るサングラスの男に話しかける。

「奴？ 一体誰ですかい？」

「フン……、十年前に姿をくらました、あの男さ」

「！ ああ、例の……」

「この十年、うまく隠れていたようだが、俺たちの目は欺き通せなかったようだな」

「楽しみですね、そいつの死に顔をおがむのが」

「俺が殺しに行けないのが残念だが」

「え？ 兄貴は行かないんですかい？」

「ああ。そこには俺以外に組織の仲間が潜伏しているからな」

銀髪の男は、持っていたタバコに火をつける。

「それで、奴の居場所は……」

フツと煙を吐き出すと、ジンと呼ばれるその男は、月に照らされる車内で不適に笑み、帝丹高校だ、と告げた。

季節は移り変わり、一般的に梅雨と呼ばれるこの時期、毎日のように降る雨に辟易とさせられていたが、今日はすっきりと晴れていた。湿度も低く、時おり吹く風が心地良い。

そんな日の朝、衣更えを済ませたばかりの帝丹高校の生徒たちは、はつらつとした表情で登校していた。

その中を一人の少女が涼し気な様子で歩いている。赤みがかった茶髪を持つ彼女は、外国の母の血をひいているせいか、どこか日本人離れしていて、近寄りがたい。しかしとても美しく、通りすぎる人の視線を引き付けずにはいられなかった。

そんな彼女に、後ろから声をかける少女がいた。

「哀ちゃーん！ おはよう！」

哀と呼ばれた少女に元気よく手を振り、隣りに並んだ少女も同じく、可憐だった。見る者すべてが癒されるようなその笑みは、茶髪の少女の心も溶かしたようだ。その証拠に、固く引き結ばれていた唇は、ほのかに緩んでいる。

「おはよう、歩美ちゃん。あら、あの二人はどうしたの？」

「元太君は朝練、光彦君は日直だって」

「そうなの」

「今日は火曜だから、探偵クラブの部室でお昼ご飯だよ、哀ちゃん！」

わかってるわよ、と茶髪の少女          灰原哀は、隣りにいる少女、

吉田歩美へと呟いた。

十年経って高校生になった彼女らは、コナンが消えた後も尚、少年探偵団を続けていた。その名を探偵クラブへと変えて。

その頃、帝丹高校二年B組の教室は、ざわついていた。

「ねえねえ、今日転校生が来るってほんと？」

「男かな？ 女かな？」

「何でもめちゃくちゃ頭良いらしいよ！」

「俺可愛い女の子が良いな」

その教室は今朝持ち込まれた転校生の話題で満ちていた。二年のこの時期に転校してくるのは珍しい。その好奇心から、生徒たちは話の中で転校生のイメージをどんどんと美化させていった。

どうやら転校生は、海外からの帰国子女で英語もペラペラ、編入試験を満点で突破する程頭が良く、何かスポーツのプロにスカウトされる程運動神経も抜群で美少年（もしくは少女）らしい、と生徒たちの意見がまとまったところで、誰かが茶々を入れた。

「おいおい、そんな理想化しちゃ転校生が可哀相だろ！」

漫画じゃあるまいし、そんな奴いるかよ、とクラスのリーダー格のような男子が、笑って皆に言う。生徒たちも冗談だよ、と笑って投げかけると、和やかな空気が漂った。ちょうど良いタイミングでチャイムがなり、担任が教室に入ってくる。

ガタガタと席に着いた生徒たちは、期待の眼差しで教壇を見ていた。

「みんな知ってると思うが、今日、このクラスに転校生がやってくることになった」

入ってきなさい、と担任がドアの方へ声をかけると、ガラッとドア開けて一人の少年が入って来た。

生徒たちはその瞬間はっと息を飲む。

「この子は海外からの帰国子女でな、なんと編入試験も満点合格

」

教師の言葉を遮って、転校生の少年はどこか興味のなさそうな表情で告げた。

「江戸川コナンです、よろしく」

漫画のような奴が、そこにいた。

## 第九話 回想

「ねえねえ哀ちゃん、隣のクラスに転校生が来たんだって！」

授業終了のチャイムがなると同時に、歩美は灰原の席に駆け寄ってくる。

さっきまで授業をしていたのに、隣のクラスの出来事をいつ知ったのだろうかという疑問などささいなことで、灰原は歩美の右手に握られているメモを眼の端にとらえつつも、それを咎めはしなかった。微笑ましそうに笑った灰原はしかし、歩美が持ってきた情報自体には興味がないのか、そう、と一返事を返しただけで、教科書で散らばった机の上を片付け始める。

その様子を見て取った歩美は、さらに言いつのる。

「なんか、すっごくカッコイイらしいよ！」

「へえ」

灰原の興味を引こうと、普通の女子高生なら飛びつくような転校生の情報も付け足してみるが、それでも彼女の関心を引けないらしい。相変わらずそっけない灰原の反応に口を膨らますと、歩美は拗ねたように灰原を見つめる。

「もう、哀ちゃんったら。花の女子高生だっていうのに、カッコイイ男の子に興味ないの？」

「無いわね」

間髪入れずに返ってきた返事はあっさりしたもので、歩美はますます口を膨らませる。灰原としては、実年齢が28歳である自分に

とつて、10歳以上も年下の男の情報には興味が持てないだけなのだが、そんなことは当の歩美が知る由もない。

フォローするように、灰原は続けた。

「歩美ちゃんこそ興味あるの？ そのカッコイイ転校生に」

膨らませた口の中をもごもごさせた歩美だったが、プシューと頬の空気を口から吐くと、あっさりと首を振った。

「だって、コナン君よりカッコイイ人なんていないもん」

その反応を見て、灰原はクスリと笑う。やはり、単なる話題として持ってきただけなのだろう。歩美自体は、その転校生に“男”としての興味はないのだ。

しかしながら、10年経った今でも歩美の中からコナンの存在は消えてはいないらしい。告白されてもコナンくん以上の男の子なんていないと断り続けていることを知っている灰原は、これから先、歩美の前に現れるだろう男たちにひっそりと同情した。コナン以上の男はそう見つかると思えない。

「そういえば、コナン君、どうしてるんだろうね」

あっさりと転校生の話から脱した歩美は、10年前に突然転校してしまった少年のことを思い出す。

本当の両親に連れられて海外に行ったと聞いていたが、あまりに突然すぎてお別れの挨拶もできず、大好きだった人だということもあって、当時の自分はわんわん泣いたものだ。

そんなことを思い返しながら、灰原に問う。

「哀ちゃん、何か連絡あった？」

「いえ、何もないわ。本当に唐突だから連絡先も聞いていないし」  
「そうだよねえ。コナン君ってばいきなり消えちゃって、当時は…  
あの事件の、後だったから……誘拐だーなんて騒がれちゃうし」

つらそうに眉をひそめた歩美だったが、暗い空気を断ち切るように笑顔を張りつかせる。

「まったく、10年間一つも連絡もくれないなんて、酷いよね。私たちのことなんて忘れちゃってるのかなあ」

小学校一年生の、ほんの数か月を共にしただけの自分たちのことなんて。

自虐的な気分になるが、灰原はそんな歩美を優しく窘めた。

「あら、あなたが惚れた江戸川君は、簡単にあなたたちのことを忘れてしまうような、そんな非人情的な人なのかしら？」

「ち、違うよ！ コナン君はいつだって優しいもん！」

顔を赤くして答える歩美に安心させるように微笑みながら、灰原は言う。

「それなら、何かきつと事情があるのよ。江戸川君はあなたたちのことを忘れてたりしないわ」

「そ、そうだよ。コナン君だもんね」

「ええ」

そう言いながら、灰原は当時のことを思い返した。

コナンが両親によって連れ帰られたという話を聞いた日、コナンの正体を知る者たちは驚き、誘拐の可能性を払拭出来なかった。

しかし、それを警察に告げることは出来ない。それを告げれば、必然的に彼の正体についても言及しないといけなくなるからだ。

江戸川文代なんて人物は実際には存在しないが、もし本当に「危なくなったら海外に連れていく」と断言していた“工藤新一の両親”がコナンを連れ帰ったのなら、自分たちに何の連絡もないのは不自然だ。彼がそんな無意味に心配させるような真似をするはずがない。

本当の両親と連絡をとって確認しようにも、世界中をたび回っている彼らの連絡先を知っているのは実の息子の工藤新一のみであり、残された者たちにそれを知るすべは無かった。

当初は警察に真実を話して彼の搜索を続けてもらおうかと話していた博士と灰原だったが、もし誘拐されていた場合、電話してきた時に何の手がかりも残さないのはおかしい。工藤やったら暗号なり、何かしら手がかり残すで、絶対、と大阪からやってきた探偵に断言されたため、とりあえず誘拐の線は消し、本当に両親と海外に行ったのだと解釈することにした。

あの両親なら、登校途中の我が子を捕まえて強制帰還くらいはしそつだ。

蘭も亡くなっただけで精神的にも辛く、自分たちにまで連絡をする余裕がないのかもしれない。

だから、きっと、落ち着いたら連絡をくれるのだろうと思っていたのだ。博士も、灰原も、服部も。

しかし結局、工藤新一と連絡が取れないまま、10年の月日が経ってしまった。



（まったく、どこで何をしているの、工藤君 ……）

灰原がこっそりと溜息をつく、廊下の方からなにやらドタバタとした音が聞こえてくる。歩美と灰原が目を合わせ、共に廊下の方に視線を向けると、教室のドアが勢いよく開けられた。

ダン！ という騒音に教室中の視線がドアに集まるが、ドアを開けた本人たちはそんなことなどお構いなしに教室に入ってくる、というより勢いよくなだれ込んでくる。

「た、大変です、歩美ちゃん！ 灰原さん！」

「た、大変だぜ！」

息を切らして教室に駆け込んできたのは、光彦と元太だった。

二人ともすっかりと成長し、声も男らしくなっている。

「どうしたの二人とも？ 何かあったの？」

「大変なんです！ コナンくんが……！」

「そうなんだ、コナン、コナンのやつが……！」

光彦と元太のいつになく慌てた様子に、歩美と灰原は首を傾げる。

「コナン君の話なら今私たちもしてたとこだよ」

「ええ。江戸川君から手紙でも……」

来てたの？ という灰原の言葉は光彦によって遮られる。

彼は全力で走ってきたのか、絶え絶えになった息をなんとか落ち着かせながら、叫んだ。

「こ、コナン君が転校してきたんですよ！隣のクラスに！」

## 第十話 転校生

江戸川コナンです、よろしく。

彼は教室の窓を眺めながら、興味という名の物質を一欠片も抱いていないかのように答えた。女子生徒はコナンの端正な顔に感嘆の息をもらすが、きれいな顔とは裏腹に、突き放すような伶俐な雰囲気を感じ取った。組の生徒たちは、さっきまでの浮かれた雰囲気はどこへやら、すっかりしんと静まり返ってしまっていた。

そんなことすらも興味がないといった風情で、江戸川コナンは教卓の横に佇んでいる。

コナンと生徒たちを見比べた担任教師は、場を取り繕おうと慌ててコナンの紹介を続ける。

「あ、うん、ああ、えーっと、江戸川君は転校してきたばかりで不慣れなことも多いだろうから、皆、仲良く」

するように、という言葉は続かなかった。

「僕の席はどこですか」

コナンがこれ以上の無駄話は許さないといった雰囲気だ教師の言葉を遮り、何の感情も宿さない瞳で教師を射抜く。

視線の強さにたじろいだ教師は、オロオロとしてコナンの座席を指差した。

「え、えーっと、そうだね、江戸川君の場所は……」

教師の答えを聞く前に、コナンは教師から視線を外すと、黙って自らの席へ歩き出した。

窓際の、一番後ろの席。

生徒でびっしり詰まった教室でそこが一つだけ空いているのが一目でわかる。形式上質問したにすぎなかったようだ。

コナンは沈黙をものともせずたすたと自分の席に赴く。生徒は一連のコナンの行動に意識を取られ、呆然とコナンの動作を見ていた。そんな周りの視線など気にもせず、コナンは席に着く。そのまま頬杖をつき、窓の外を見つめた。

そんなコナンを睨みつける生徒が幾人かいた。周囲との接触を断つようにあからさまな拒絶の態度に、さっそくクラスの男子の反感を買ったようだ。

教師は思った。

これは一波乱ありそうだと。

帝丹高校2年B組が初の担当クラスである教師、田嶋にとって、これから起こるであろう出来事にひっそりと嘆息せずにはいられなかった。

結局B組の教室の雰囲気は、あまり芳しくないまま授業が始まっ

た。

授業が始まってからも、コナンの視線が窓の外から外れることはなかった。

そのあからさまな授業放棄の態度に腹を立てた教師が、難易度の高い問題をコナンにあてて見るが、授業を聞いているんだか聞いていないんだか傍目からはわからないコナンは微動だにせず、答えを寸分も変わらず吐きだした。

教科書も見ず、計算式も書かずにすらすらと解答を述べられてしまった教師は、たじろぐも、編入試験が満点の転入生ということを思い出し、それ以降コナンに注意することはなく、授業が進められた。

授業が終わり、休み時間。

女子とは強い生き物で、今までのコナンの態度を見ても、くじけなかった。なんとかコナンの情報を得ようと果敢にそばに寄る。なんとなく近づき難い雰囲気が漂っていたが、一人の女子生徒が勇気を出して近寄れば、また一人、また一人とコナンに話しかけていった。

「江戸川くん頭良いんだね！」

「編入試験満点って本当だったんだ！？」

「英語ペラペラなの？」

「彼女はいる？」

しかしコナンは彼女たちをチラリと見ることもせず、溜息を吐くと、立ち上がってそのまま教室を出て行ってしまった。

そんな一連の行動すらも、女子にしてみれば“クールでカッコイイ”のである。コナンが出て行っただけから、女子はキヤークイイ騒いでいた。

大きな眼鏡で隠されてはいるが、コナンは人目を引くほどかっこいい。おまけに頭も良いとくれば、女子が興味を持たないはずがなかった。たとえどんなに冷たい態度でも、“クールでカッコイイ”と評してしまうのが女子高生という生き物だ。

そんな女子の反応とは裏腹に、男子の反応は冷ややかだ。あの態度もさることながら、女子にキヤークイイ言われているのも気に食わない。このままでは男子生徒とコナンとの衝突は避けられまい。クラスのリリーダ格であった男子は、コナンを睨みつける幾人かの生徒を見、相変わらず頑なな態度のコナンを見て、溜息を吐いた。

そして、四限目の授業が終了し、昼休み。

もろもろにお弁当を広げる生徒たちを横目に、相変わらず窓の外を眺めているコナンの傍に近寄る男子生徒がいた。髪は短く切りそろえ、多少染めてはいたが、肌は日に焼け健康そうな色をしている。見るからにスポーツ少年といった風情の男だった。

皆仲間同士でわいわいと喋っていたが、二人の様子が気になるのか、チラチラと窓際の後ろの方向を見ている。

コナンの前に立つと、その男子生徒は言った。

「おれ、八城明人っていうんだけど」

男子生徒                      八城は、反応が得られないのも気にせず、コナンに話しかける。

「江戸川……だっけ？    あのさ、このままじゃお前、いらぬ争いの種振りまくぜ」

ようするに、もう少し態度を和らげると忠告しにきたのだ。  
クラスの雰囲気が悪くなるのは願い下げだった。

ようやく八城を見たコナンだが、何か言おうと口を開いた矢先、ドタドタと騒々しい足音がすると、ドアがバタンと勢いよく開けられた。皆の視線がドアに集中する。

「コナン！」

「コナン君！」

ドアが開けられると同時に、バタバタと人がなだれ込んでくる。歩美、元太、光彦、灰原だ。ダッシュしてきたのか、皆一様に息を切らしていた。それぞれ教室を見回すと、窓際の席に座っているコナンを見つける。

10年ぶりだったが、歩美たちにはコナンがすぐにわかった。

パッと顔を輝かせると、足早にコナンに近づく。

「ほんとだ！    コナン君だ！」

「コナン君、お久しぶりです！」

「水くせえぞコナン！    俺たちに転校してくること言わねえなんてよ！」

「そうですねー！ 何で教えてくれなかったんですか？」

「いいじゃない二人とも！ こうして会えたんだからさ」

「まったく、江戸川君、あなた、今までどこに行っていたの？」

十年ぶりのコナンとの再会に皆喜んで話かけるが、コナンからの返答は得られない。次第に違和感を覚え始めた探偵団の会話が途切れ、コナンと探偵団の間に沈黙が訪れる。

いぶかしんだ歩美が、コナンに問いかけた。

「コナン君、どうしたの……？」

しかしコナンは、かつての彼とは別人のような冷たい目、冷たい口調で、言った。

「誰だ？ お前ら」

「っ……！！」

探偵団はとつさに言葉を返すことができない。彼が自分たちのことを覚えていないことが思いの外ショックで、彼の言葉に反応することができなかった。

一方で灰原は、コナンの声を聞いた瞬間、歩美たちとは別の意味で身の凍りつくような思いを感じていた。

一瞬にして顔が青白く染まる。頭の中は疑問符でいっぱいだった。

（なんで？

どうして？）



手の震えを隠すために、灰原は両手を握りしめた。

（あれから十年経ったのよ、皮肉にも十年の刻が私たちを元の体に戻したはずなのに、どうして、どうして彼は……）

彼は声変わりをしていないの。

## 第十一話 崩壊の音色

Bクラスのリーダー格である男子生徒、八城明人は戸惑っていた。ふてぶてしい態度を取る転校生を窘めるだけのつもりが、何故こんなにも重い空気を漂わせることになってしまったのか。その原因の一端となった者たちを八城はチラリと横目で見ると。

帝丹高校探偵クラブ。

この学校に通っている生徒の中で知らないものはいないと言われるほど有名なクラブである。何か困ったことがあれば彼らに相談すると解決してくれるため、世話になったことのある生徒はとても多かった。その解決能力の高さもさることながら、彼らを学校一有名にしたのがクラブを構成する特異なメンバーにある。

学校一の才女と呼ばれ、異国風の出で立ちと知的な美貌に焦がれるものが多くいる、灰原哀。

そしてその灰原哀と一番の親友である吉田歩美。彼女もまた天真爛漫で明るく、その可愛らしい容姿に魅了されている男子生徒が後を立たない。

二人はまさに帝丹高校の二大アイドルであり、探偵クラブとは関係なく、有名な少女たちであった。

そしてまた、灰原と並んで秀才と称される円谷光彦。

科学の分野では灰原に劣るものの、他の教科では彼女と匹敵する頭脳を持ち、知識量や推理力は他の追随を許さないほどであり、彼の紳士で優しい性格と丁寧な口調は女子生徒に人気があった。

最後に、二年にして柔道部主将をやっている、小嶋元太。その強

さは関東大会で優勝を飾るほどで、残念ながら女子生徒にはさほどでもないが、正義感にあふれ、少々短気ではあるが裏表がなく豪快な性格の彼を慕う男子生徒は多かった。

この四人は小学校からの持ちあがり組で、今もとても仲がいい。そんな彼らを羨ましいと遠巻きに見る生徒が多く、探偵クラブへの入部希望者も多いが、このメンバーに釣り合う能力がないと尻ごみしている生徒ばかりで、クラブ発足から一年が経ってもメンバーはこの四人のままであった。

そんな、学校一有名といってもいい四人組が勢いよく教室になだれ込んで来て、この転校生の前に立ったのだ。聞けば、どうやら彼らは転校生と知り合いであるらしい。それもどうやらかなりの親密さであるようだ。

もしかして、彼らなら、この頑なな転校生の心を溶かしてくれるかもしれない。

けれどほんの一瞬抱いたその淡い期待は、渦中の転校生によってすぐに打ち砕かれた。

\*\*\*

「誰だ、って……やだなあ、コナンくん。私、歩美だよ！」

受けたショックを誤魔化すように笑顔で名前を言ってみるが、思ったような反応は得られない。どうしよう、と隣にいる灰原に視線を送るが、彼女は酷く青ざめながら俯いていて、こちらを見もしない。

「哀ちゃん、大丈夫？」

そつと小声で話しかけると、灰原は蒼白のままこくりと頷く。

「……大丈夫よ、ちょっと、驚いただけ」

何とか絞り出したような声でそう言っ、コナンを見る。

瞬間、訪れる、奇妙な違和感。

それが何かを理解しようとする前に、元太の声が灰原の思考を止めた。

「何だよコナン！ 俺たちのこと忘れちゃったのか？ 薄情なやつだなあ！」

冗談めかして元太が言うが、コナンは冷たい視線をよこすだけだ。元太がその視線を受けていきり立つのを見てとり、慌てて光彦がフオローを入れる。

「まあ十年経ちますからね、姿形も大分変わりましたし一見分からないのは仕方ないですよ。ほらコナン君くん、僕ですよ僕、円谷光彦！ こっちはうな重大好き元太くん！」

肩をポンポンと叩く光彦に元太は何か言いたそうな視線を向けるも、光彦の意図を察しその場は言葉を飲み込む。気を取りなおして

元太はコナンに向き直った。

「ほら、小学校一年生の時、俺らで少年探偵団やってただろ。オメーがいたのは数ヶ月間だけだったけどよ、いつかオメーが戻って来てくれたらって、今も探偵クラブって名前でそれ続けてるんだぜ」

「と言っても失せ物探しばっかりで、昔みたいな事件は全然起きないんですけど」

「そうそう。昔の事件三昧は何だったんだーってくらい、平和な日々だよな」

「事件が起きないのが、一番いいんだけどな！」

「昔の事件って言えば、コナンくん、猫探ししたの覚えてる？ あの猫、すごく長生きで、今でも抜け出しては探してくれて時々依頼が……」

ガタツ。

話を遮るようにコナンは椅子から立ちあがった。

「こ、コナンくん、どこ行くの？」

「……何度も同じこと言わせるなよ。俺はお前らなんて知らない。思い出話ならよそでやってくれ」

「ちょっと、江戸川君！」

その場を離れようとしたコナンを逃がすまいと灰原は彼の腕を掴む。それを煩わしそうに振り返ったコナンは、その腕が思いの外力

強く握られ簡単には振りほどけないと悟ると、灰原を睨みつけた。  
途端、先程の違和感の正体を彼女は知る。

視線が、近い。

工藤新一は、もう少し、背が高くなかったか。

思えば、かつての彼と比べて、少し顔立ちが……幼い。

腕を掴んで引きとめたのは灰原の方であるにも関わらず、目の前  
にある現実には二の句を告ぐことが出来ない。灰原の動揺を察したの  
か否か、コナンは幾分緩んだ腕の拘束を軽く振り払うと、彼女らを  
ねめつけて言った。

「言っただろ。俺は、お前らのことなんて、何も覚えてない」

一言一言を区切りながら、強い口調で断言する。それでも尚納得  
の行かない顔をする彼らにコナンは更に付け加えた。

「昔の知り合いだかなんだか知らないが、七歳の、それもたった数  
カ月しか過ごしていない奴らに友達面をされるのは迷惑だ」

「そんな……そんな言い方って」

コナンのキツイ言葉に、歩美は涙を溢れさせる。光彦が慌てて歩  
美のそばに寄り、宥めるように背を撫でた。元太はついに堪えるの  
をやめ、コナンに掴みかかる。

「コナン！ オメーいい加減にしろよ！ 俺たちのこと、本当に忘れちゃったのか！？」

「元太君、落ち着いてください！ 暴力はダメです！」

「げ、元太くん、やめてよぉ！」

コナンの胸元を掴む元太の手を緩めようと光彦が彼の腕に手をかけるが、柔道部主将なだけあって、日々鍛えている彼の太い腕はビクともしない。

しかし当のコナンはどこ吹く風で、普通の男ならがっしりとした大きい体格の元太に睨まれれば多少は恐怖心を感じるものだが、体格差のある彼に睨まれても、コナンの冷たい表情が変わることはなかった。

その余裕のある態度が、歩美の声も届かないほどに、元太の頭に血を上らせる。

苛立ちが導くまま、元太は腕を振り上げた。

「やめなさい！」

滅多に聞けない灰原の怒声が教室に響き渡る。

その大きな怒りの声に正気づいた元太は、ピタリと動きを止めた。足早に元太に近づきコナンの胸倉を掴む腕を外させると、傍で平然と身なりを正しているコナンに目を向ける。

その彼らしからぬ様子に、灰原は眉を寄せた。

「あなた、一体何があったの、工藤く　　！」

ぐっ、と、コナンの右手が灰原の口を押さえ言葉の先を封じ込め

た。

苦しげに呻く灰原をそのまま右手で力強く引き寄せ、耳元で低く囁く。

「俺は、江戸川だぜ？ 灰原」

かつての彼とは似ても似つかない冷酷な響きを持つその声に灰原は一瞬息を飲む。そして、彼女の中の何かがざわりと微かな警鐘を鳴らした。

コナンは灰原を乱暴に突き放すと、光彦が慌てて彼女を支える。それを見るときもなく教室から出ようとするコナンに元太が再び掴みかかりそうになるのを、灰原が手で制す。

しかし、光彦が彼の行動を許さなかった。

「コナン君！ いくらなんでも女性に乱暴すぎやしませんか！？  
一体どうしちゃったって言うんですか！ 昔の君はこんなんじゃない……！」

「……なかったって？ 残念だったな。昔の俺がどうだったか知らないが、お前らの言う“コナンくん”はここにはいねえよ」

嘲るような口調で言われて、光彦はぐっと押し黙る。

誰よりも優しく、誰よりもカッコよくて、誰よりも強い少年だった。

彼がいなくなってしまった後もいつも見えない背中を追いかけてきた。

彼はいつだって自分たちを助けてくれた。守ってくれた。自分たちを導いて、背中を押して、そして、いつだって笑顔を見せて笑ってくれたのだ。



嫉妬をすることもあつたけれど、それでもコナンは光彦の憧れだった。

ヒーローだった。

そんな彼が。

今、自分を冷たい眼差しで見ている。

もしもコナンと再会したら、成長した自分を見せて、褒めてもらうのだ。

そして今度は自分が、一人で前を走るコナンの助けになりたい  
そんな夢がガラガラと音を立てて崩れていく。

かつてのコナンの面影を残しながら、かつてのコナンとは全く違う眼差しで彼は光彦の前に立っていた。

すっかり様子の変わってしまったコナンを、光彦はこれ以上見ていたくなかった。

「……行きましょう、みんな。コナン君、突然押し掛けてきてしまった、すみませんでした」

「おい光彦！　こうまで言われて、黙ってろって言うのか！！」

恪気を帯びた元太が光彦に食ってかかる。しかし彼は強い口調でそれを窘めた。

「元太君！　ここでこれ以上言い争っても無意味です！　僕たちはこの騒ぎの視線の多さを、少し鑑みるべきだ！」

そこでハツと元太は周囲の視線に気がついた。  
クラス中が静まりかえり、廊下の外からも生徒たちが彼らの動向

をハラハラしながら覗きこんでいる。中にはコナンを睨みつけている者もあり、今後、転校してきたばかりであるコナンへの風当たりが強くなるであろうことが容易に想像できた。

コナンの言動には腹が立つが、学校生活を過ごしにくくさせるつもりはない元太は、怒りを何とか抑え、平静を取り戻す。

自分より頭一つ分小さいコナンの背を見つめると、静かに口を開いた。

「……なあ、コナン。昔のことは、この際忘れたっていい。でも、俺らはオメーのこと、今も昔も大事なダチだと思ってる。それだけは忘れんなよ」

表情は見えないが、どうせ、聞き流されているに違いない。それでも、それだけはどうしても言っておきたかった。

溜息を一つ吐くと、元太は泣いている歩美の傍に寄り、彼女の頭をポンポンと撫でた。

「……とりあえずお前ら、もうすぐ昼休みが終わるぜ」

それまで黙って様子を見ていた八城が何とか言葉を絞りだすと、静かな教室にタイミングよくチャイムのベルが鳴り響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9814/>

---

漆黒は染まらない

2011年9月15日08時08分発行